『比較論理学研究』第 4 号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2006)

Paribhāṣenduśekhara 50: asiddhaṃ bahiraṅgam antaraṅge 研究（2）

間瀬　忍

本稿は前稿[1]に続く，18 世紀のパーニニ文法家ナーゲーシャ・バッタによって著された『パリバーシェーンドゥシェーカラ』の解釈規則 50: asiddhaṃ bahiraṅgam antaraṅge（以下，antaraṅga 解釈規則と表記）の翻訳研究である。今回その翻訳を試みた箇所の内容を大別すると，以下の通りである。

(1)antaraṅga 解釈規則の意味
(2)tripādīで規定されている規則が antaraṅga であり，sapādasaptādhyāyīで規定されている規則が bahiraṅga である場合，P.8.2.1 pūrvatrāsiddham により，antaraṅga 解釈規則が無効となることの説明
(3)P.6.4.132 に言及されている *ūṬH* が antaraṅga 解釈規則の指標（jñāpaka）であることの証明

このように，今回の翻訳箇所は antaraṅga 解釈規則の存在性と意味を説明する極めて重要な箇所である。

2. antaraṅga 解釈規則の解釈

【2.1. antaraṅga 解釈規則の意味】

antaraṅge kartavye jātaṃ tatkālaprāptikaṃ ca bahiraṅgam asiddham ity arthaḥ / vṛścatyādiṣu padasaṃskārapakṣe samānakālatvam eva dvayor iti bodhyam //

antaraṅga［の適用］が実現されるべきとき，すでに生じている (jāta) bahiraṅga あるいはその［antaraṅga］と同時に結果する (tatkālaprāptika) bahiraṅga［の適用］はまだ成立していない，というのが［この解釈規則の］意味である。

vṛścati（「彼は切り落とす」*vraśc*, 3rd. sg. pres. P.）などの事例において，〈語形成見解〉(padasaṃskārapakṣa) では，まさに［P.6.1.66 による *v* 音の脱落操作と P.6.1.16 による「saṃprasāraṇa」代置操作の］両方が同時に適用されると理解されるべきである[2]。

[1]間瀬 [2006a]

[2]【本文の解説】ナーゲーシャは，ここで「〈語形成見解〉(padasaṃskārapakṣa) では」と述べることによって，〈段階的派生法〉(krameṇānvākhyāna) によって派生された場合にはこれら二つの規則は同時には適用されないということを意図している。

パーニニ文法学において語を派生するためには大きく分けて二つの方法がある。動詞語根などの要素に，附加辞や接尾辞などの要素を順番に加え，それらの要素が一つ加えられるたびにその段階で適用できる操作を適用していく手法（段階的派生法，krameṇānvākhyāna）と最初に語の全ての構成要素を並列に並べてそれら全ての要素に対して適用可能な規則を順番に適用していく手法（並列的派生法，vibhajyānvākhyāna）である。vibhajyānvākhyāna はさらに二つに分けられる。「pada」を構成要素に分解して規則を適用する〈語形成見解〉と文章を構成要素に分解して規則を適用する〈文形成見解〉(vākyasaṃskārapakṣa) である。

〈語形成見解〉に従って *vṛścati* の派生を以下に示す。

【*vṛścati* の派生】

(1) *vraśc* + *Śa* + *ti*
(2) *vraśc* + *a* + *ti* P.6.1.16
(3) *vṛśc* + *a* + *ti* P.6.1.108
vṛścati
*(2) *raśc* + *a* + *ti* P.6.1.66
*(3) *ṛaśc* + *a* + *ti* P.6.1.16
*(4) *ṛśc* + *a* + *ti* P.6.1.108

［派生説明］

(1) の段階で *vṛścati* の構成要素が並置される。(2) の段階で *Śa* は P.1.2.4 により *Ñit* として扱われるので P.6.1.16 により *vraśc* の *r* に「saṃprasāraṇa」である *ṛ* が代置される。(3) の段階で「saṃprasāraṇa」である *vraśc* の *ṛ* は *a* に後続されているので P.6.1.108 により *ṛ- a* に先行要素である *ṛ* が唯一代置され，*vṛścati* が派生される。このように，〈語形成見解〉では，まず全ての要素が並べられ，そのあとにそれら全ての要素に対する操作が同時に適用可能となる。*vṛścati* の場合は (1) の *vraśc+a+ti* の段階で実際に

【2.2. 解釈規則：antaraṅgaṃ bahiraṅgād balīyaḥ の否定】

etenāntaraṅgaṃ bahiraṅgād balīya iti paribhāṣāntaram ity apāstam / enām āśritya vipratiṣedhasūtre bhāṣye tasyāḥ pratyākhyānāc ca / antaraṅgaśāstratvam asyā liṅgam /

このことから，当該解釈規則とは別に「bahiraṅga より antaraṅga が強力である」(antaraṅgaṃ bahiraṅgād balīyaḥ) という解釈規則が成立する，という見解は否定される。そして［この見解は］ P.1.4.2 に関する Bhāṣya において［パタンジャリが］この当該解釈規則に基づいてその［解釈規則］を拒絶していることからも［否定される］[3]。

antaraṅga である文法規則であることが当該解釈規則］の［適用の］目印 (liṅga) である[4]。

【2.3. P.6.4.132 の*ūṬH* が示す antaraṅga 性】

【2.3.1. tripādī中の規則に対する antaraṅga 解釈規則の適用】

【2.3.1.1. tripādīでの antaraṅga 解釈規則の適用の否定】

iyaṃ ca tripādyāṃ na pravartate tripādyā asiddhatvāt /

そしてこの［解釈規則］は tripādī (P.8.2–4) においては実効しない。なぜなら［P.8.2.1 pūrvatrāsiddham により］ tripādīは［sapādasaptādhyāyī (P.1–P8.1) に対して］成立していないからである。

適用可能な操作は二つある。*(2) で示した，P.6.1.66 で規定されている *vraśc* の *v* 音の脱落操作と，(2) の段階で実際に適用されている，P.6.1.16 によって規定されている *vraśc* の *r* に対する「saṃprasāraṇa」代置操作である。

このように二つの操作が同時に適用可能な場合，どちらの操作が優先して適用されるかを決定しなければならない。その場合に規則の適用の優先性を決定するために用いられるのが antaraṅga 解釈規則である。この例においては先におこる要素である動詞語根を根拠とする *v* 音の脱落操作の方が，後で動詞語根に結合される要素である*Śa* を根拠とする「saṃprasāraṇa」代置操作よりも antaraṅga であるから，*v* 音の脱落操作の適用は「saṃprasāraṇa」代置操作が適用されるとき成立していない。したがって，*v* 音の脱落操作が「saṃprasāraṇa」代置操作に対して優先適用される。

しかし，この事例の場合には *vraśc* は Dhātupāṭha に *vraśc* と表示されていることから，Dhātupāṭha の権威を重んじて，この操作は適用されず，(2) の段階で P.6.1.16 による「saṃprasāraṇa」代置が適用され，*vṛścati* が派生される。詳細は間瀬 [2006a] 参照

【関連規則】

P.3.2.123 vartamāne laṭ // (「現在に属する行為を表示する動詞語根のあとに *lAṬ*接辞がおこる」)

P.3.4.78 tiptasjhisipthasthamibvasmastātāṃjhathāsāthāṃdhvamiḍvahimahiṅ // (「*L* 音の代わりに，*tiP*, *tas*, *jhi*, *siP*, *thas*, *tha*, *miP*, *vas*, *mas*, *ta*, *ātām*, *jha*, *thās*, *āthām*, *dhvam*, *iṬ*, *vahi*, *mahiṄ* という代置要素がおこる」)

P.3.1.77 tudādibhyaḥ śaḥ // (「行為主体を表示する「sārvadhātuka」が後続するとき，*tud*「打つ」に始まる一群の動詞語根のあとに*Śa* 接辞がおこる」)

P.6.1.16 grahijyāvayivyadhivaṣṭivicativṛścatipṛcchatibhṛjjatīnāṃ ṅiti ca // (「*K* あるいは*Ṅ* を it として持つ接辞が後続するとき，*grah*「捉える」，*jyā*「古くなる」，*veñ*「編む」，*vyadh*「貫く」，*vaś*「欲求する」，*vyac*「騙す」，*vraśc*「切る」，*pracch*「尋ねる」，*bhrasj*「あぶる」というこれらの動詞語根の半母音の代わりに「saṃprasāraṇa」がおこる」)

P.6.1.108 samprasāraṇāc ca // (「「saṃprasāraṇa」に母音が後続するとき，先行要素と後続要素の代わりに唯一先行要素が代置される」)

P.6.1.66 lopo vyor vali // (「*v* 音または *y* 音に *vAL* が後続するとき，*v* 音または *y* 音は脱落する」)

P.1.2.4 sārvadhātukam apit // (「*p* を it として持たない「sārvadhātuka」は*Ṅit* とみなされる)

---

[3]P.1.4.2 に対する vt. 8 で antaraṅga 規則が後続規則 (para), nitya 規則などに対して強力 (balīyas) であることが述べられている。そしてその vt. 8 に基づけば bahiraṅga に対しても antaraṅga が強力であると考えられる。しかしパタンジャリは，P.1.4.2 に関する Bhāṣya において，bahiraṅga に対して antaraṅga が優先適用される根拠は antaraṅga 解釈規則であり，bahiraṅga に対する antaraṅga の強力性ではないと述べている。ナーゲーシャは，その Bhāṣya においてパタンジャリは antaraṅgaṃ bahiraṅgād balīyaḥ という解釈規則を否定していると考えるのである。

vt. 8 on P.1.4.2 (I. 306.11-12) : antaraṅgaṃ ca //
(「さらに，antaraṅga は強力であると言われるべきである」)

MBh on P.1.4.2 (I. 310.2-4) : ubhe tarhi kartavye / nety āha / anayaiva siddham / ihāpi syonaḥ syonety asiddhatvād bahiraṅgalakṣaṇasya guṇasyāntaraṅgalakṣaṇo yaṇādeśo bhaviṣyati //
(「【反論】その場合，［antaraṅga 解釈規則と antaraṅgaṃ ca という言明の］両方が適用されるべきである。【答論】そうではないと述べる。この［antaraṅga 解釈規則］だけによって［語形が］確立される。*syonaḥ*, *syonā* というこれらの［事例に］おいても，bahiraṅga として特徴づけられる「guṇa」代置が成立しないから antaraṅga として特徴づけられる半母音代置がおこるだろう」)

[4]ナーゲーシャによれば，操作に必要な解釈規則はその操作を規定した操作規則にある目印 (liṅga) によってその操作に引きつけられる。

PIŚ (6.1-2): kāryeṇa svasaṃskārāya svavṛttiliṅgacihnitaparibhāṣāṇām ākṣepa iti yāvat /
(「要するに，文法操作は自身の形成のために自身に存在する目印によって指し示される解釈規則を引きつけるということである」)

したがってこの場合も antaraṅga である文法規則がこの解釈規則を引きつけると考えられる。

【2.3.1.1.1. P.6.4.132 の*ūṬH* が指標であることの証明】

【2.3.1.1.1.1. P.6.4.132 の*ūṬH* が指標である理由】

asyāṃ ca vāhaūṭhsūtrastham ūḍhgrahaṇaṃ jñāpakam ity eṣā sapādasaptādhyāyīsthā / anyathā saṃprasāraṇamātravidhānena laghūpadhaguṇe vṛddhir eci (P.6.1.88) iti vṛddhau viśvauha ityādisiddhes tadvaiyarthyaṃ spaṣṭam eva / satyāṃ hy etasyāṃ bahirańgasaṃprasāraṇasyāsiddhatvāl laghūpadhaguṇo na syāt //

そして，この［解釈規則］に関してはP.6.4.132 vāha ūṭh という規則における*ūṬH* の言及が指標 (jñāpaka) であるから，この［解釈規則］は sapādasaptādhyāyī中にある。もしそうでないとするならば，その［*ūṬH* の言及］が無益となることはまったく明らかである。なぜなら，［P.6.4.132 に*ūṬH* が言及されなくても，P.6.4.131 から継起した］「saṃprasāraṇa」だけが規定されることによって，「upadhā」の「laghu」［である *iK*］に「guṇa」代置が［適用され］，P.6.1.88 vṛddhir eci による「vṛddhi」［代置］が［適用されれば］*viśvauhaḥ*（*viśvavāh*「全てを支えるもの」, acc. pl.）など［の語形］が確立されるからである。実にこの［解釈規則の適用］がある場合には，bahirańga である［P.6.4.132 による］「saṃprasāraṇa」代置［の適用］は成立していないので，［antarańga である P.7.3.86 による］「upadhā」の「laghu」［である *iK*］に対する「guṇa」代置はおこりえないであろう[5]。

[5]【本文の解説】パーニニは antarańga 解釈規則の存在を意図して P.6.4.132 に*ūṬH* という言及をした。なぜなら，antarańga 解釈規則がないとするならば，P.6.4.132 に*ūṬH* を言及しなくても，次のように派生を説明することができるからである。

【*viśvauhaḥ*の派生：P.6.4.132 に*ūṬH* が言及されていない場合】

(1)	*viśva-Ňas*	+ *vah*	+ *ṆvI*	+ *Śas*			
(2)	*viśva-as*	+ *vah*	+ *ϕ*	+ *as*	P.6.1.67		
(3)	*viśva-as*	+ *vāh*	+ *ϕ*	+ *as*	P.7.2.116		
(4)	*viśva*	+ *vāh*	+ *ϕ*	+ *as*	P.2.4.71		
(5)	*viśva*	+ *uāh*	+ *ϕ*	+ *as*	*P.6.4.132		
(6)	*viśva*	+ *uh*	+ *ϕ*	+ *as*	P.6.1.108		
*(7)	*viśva*	+ *oh*	+ *ϕ*	+ *as*	P.7.3.86		
*(8)	*viśvauh*		+ *ϕ*	+ *as*	P.6.1.88		
*(9)	*viśvauh*		+ *ϕ*	+ *arU*	P.8.2.66		
*(10)	*viśvauh*		+ *ϕ*	+ *aḥ*	P.8.3.15		
	**viśvauhaḥ*						

［派生説明］

(1) の段階で *viśvauhaḥ*の構成要素が並べられる。(2) の段階で P.6.1.67 により，*v* に *ϕ* が代置され，*ṆvI* が脱落する。(3) の段階で*Ṇ*を it として持つ*ṆvI* に後続された *vah* の「upadhā」の *a* に P.7.2.116 によって「vṛddhi」が代置される。(4) の段階で P.2.4.71 により *viśva* に後続する *sUP* である*Ňas* が脱落する。(5) の段階で *viśvavāh* は P.1.4.18 により「bha」であるので，P.6.4.132 により *vāh* の *v* に「saṃprasāraṇa」である *u* が代置される。(6) の段階で P.6.1.108 により「saṃprasāraṇa」である *u* とそれに後続する *ā* に先行要素である *u* の唯一代置がおこる。*(7) の段階で *uh* は「ārdhadhātuka」に後続されているので，P.7.3.86 により「laghu」である「upadhā」の *u* に「guṇa」が代置される。*(8) の段階で *viśva* の *a* に *oh* の *o* が後続しているので P.6.1.88 により *a* と *o* に「vṛddhi」の唯一代置がおこる。*(9) の段階で P.8.2.66 により「pada」の最終要素である *s* に *rU* が代置される。*(10) の段階で「pada」の最終要素である *rU* に*ḥ*が代置され，viś*vauhaḥ*が派生される。

しかしパーニニは次のように考えて P.6.4.132 に*ūṬH* を言及した。P.6.4.132 に対して P.7.3.86 による「guṇa」代置操作は antarańga である。したがって antarańga 解釈規則により，*(7) の段階で P.6.4.132 が適用された後の語形に対しては，P.7.3.86 による「guṇa」代置操作は適用できないことになる。したがって antarańga 解釈規則の適用が回避されなければならない。この目的を果たすのが，*ūṬH* の当該規則における言及である。

この場合，P.7.3.86 による「guṇa」代置の根拠は *vah* と *ṆvI* であるのに対し，P.6.4.132 による*ūṬH* 代置の根拠は *vah* と *ṆvI* が結合されたあとの語形である *vāh* である。したがって結合されるまえの要素を根拠として持つ「guṇa」代置が antarańga である。間瀬 [2006b] 参照。

なお，*viśvauhaḥ*の実際の派生は以下の通り。

【*viśvauhaḥ*の派生：P.6.4.132 に*ūṬH* が言及されている場合】

(1)	*viśva-Ňas*	+ *vah*	+ *ṆvI*	+ *Śas*			
(2)	*viśva-as*	+ *vah*	+ *ϕ*	+ *as*	P.6.1.67		
(3)	*viśva-as*	+ *vāh*	+ *ϕ*	+ *as*	P.7.2.116		
(4)	*viśva*	+ *vāh*	+ *ϕ*	+ *as*	P.2.4.71		
(5)	*viśva*	+ *ūāh*	+ *ϕ*	+ *as*	P.6.4.132		
(6)	*viśva*	+ *ūh*	+ *ϕ*	+ *as*	P.6.1.108		
(7)	*viśvauh*		+ *ϕ*	+ *as*	P.6.1.89		
(8)	*viśvauh*		+ *ϕ*	+ *arU*	P.8.2.66		
(9)	*viśvauh*		+ *ϕ*	+ *aḥ*	P.8.3.15		
	viśvauhaḥ						

［派生説明］

(1) の段階で *viśvauhaḥ*の構成要素が並べられる。(2) の段階で P.6.1.67 により，*v* に *ϕ* が代置され，*ṆvI* が脱落する。(3) の段階で*Ṇ*を it として持つ*ṆvI* に後続された *vah* の「upadhā」の *a* に P.7.2.116 によって「vṛddhi」が代置される。(4) の段階で P.2.4.71 により *viśva* に後続す

【2.3.1.1.1.2. P.6.4.132 に*ūṬH* が言及されていない場合でも *viśvauhaḥ*の派生に antarańga 解釈規則の適用機会はないという反論の否定】

na ca puganta (P.7.3.86) iti sūtre nimittam iko viśeṣaṇam ata eva bhinattītyādau na guṇa evaṃ ca nājānantarye iti niṣedhāt kathaṃ paribhāṣā-

pravṛttir iti vācyam / pratyayasyāṅgāṃśa utthitākāṅkṣatvena tatraivānvayāt / pugantetyādau karmadhārayāśrayaṇena pratyayaparāṅgāvayavalaghūpadhārūpeko guṇa itīko guṇavṛddhī (P.1.1.3) iti sūtrabhāṣyasaṃmate 'rthe bhinattītyādāv adoṣāc ca //

【反論】しかし，P.7.3.86 pugantalaghūpadhasya ca という規則における［「guṇa」代置の］適用根拠は *iK* の限定要素である。まさにこのことから *bhinatti*（「彼は裂く」*bhid*, 3rd, sg.pres. P.）などの事例において「guṇa」［代置は適用］されない[6]。そしてこのような場合，PIŚ51: nājānantraye bahiṣṭvaprakḷptiḥという解釈規則[7]によって［「guṇa」代置がbahiraṅgaであることは]否定されるから，どうしてantaraṅga解釈規則が適用されよう[8]。

る *sUP* である*Ñas* が脱落する。(5) の段階で *viśvavāh* は P.1.4.18 により「bha」であるので，P.6.4.132 により *vāh* の *v* に「saṃprasāraṇa」である*ū* が代置される。(6) の段階で「saṃprasāraṇa」である*ū* とそれに後続する母音である*ā* に P.6.1.108 により先行要素である*ū* の唯一代置がおこる。(7) の段階で*ūṬH* に *a* が先行しているので P.6.1.89 により *a* と*ū* に「vṛddhi」が唯一代置される。(8) の段階で P.8.2.66 により「pada」の最終要素である *s* に *rU* が代置される。(9) の段階で「pada」の最終要素である *rU* に休止が後続しているので P.8.3.15 により *rU* に*ḥ*が代置され，viś*vauhaḥ*が派生される。

【関連規則】

P.6.1.67 ver apṛktasya //（「「apṛkta」である *v* に脱落がおこる」）

P.7.2.116 ata upadhāyāḥ //（「*Ñ*あるいは*Ṇ*を it として持つ接辞が後続するとき，「aṅga」の「upadhā」の「laghu」である *a* の代わりに「vṛddhi」がおこる」）

P.2.4.71 supo dhātuprātipadikayoḥ //（「「dhātu」（動詞語根）という術語で呼ばれるものと，「prātipadika」（名詞接辞）という術語で呼ばれるもの内部に含まれる *sUP* に脱落がおこる」）

P.6.4.132 vāha ūṭh //（「*vāh* でおわる「bha」の *v* の代わりに「saṃprasāraṇa」である*ū* (*ūṬH*) が代置される」）

P.6.1.108 samprasāraṇāc ca //（「「saṃprasāraṇa」に母音が後続するとき，先行要素と後続要素の代わりに唯一先行要素が代置される」）

P.7.3.86 pugantalaghūpadhasya ca //（「「sārvadhātuka」と「ardhadhātuka」が後続するとき，「aṅga」の *pUK* の先行要素である *iK* の代わりに，あるいは，「aṅga」の「laghu」である「upadhā」である *iK* 代わりに「guṇa」がおこる」）

Kāśikā に従えば，P.7.3.86 は「「sārvadhātuka」と「ardhadhātuka」が後続するとき，*pUK* を最終要素とする「aṅga」の *iK* の代わりに，あるいは，「upadhā」に「laghu」をもつ「aṅga」の *iK* の代わりに「guṇa」がおこる」というように解釈できる。しかし，この節においてナーゲーシャは注9に挙げたBhāṣya に基づく P.7.3.86 の解釈が正しい解釈であることを前提としているので，それを P.7.3.86 の解釈として上に示した。

P.6.1.88 vṛddhir eci //（「*a* 音に *eC* が後続し，*eC* に *a* 音が先行するとき，その先行する *a* 音と後続する *eC* の代わりに「vṛddhi」が唯一代置される」）

P.8.2.66 sasajuṣo ruḥ //（「*s* を最終要素として持つ「pada」と *sajuṣ*というこの「pada」の最終要素の代わりに *rU* がおこる」）

P.8.3.15 kharavasānayor visarjanīyaḥ //（「*khAR* と休止が後続するとき *r* を最終要素として持つ「pada」の最終要素に visarga 代置がおこる」）

P.6.1.89 etyedhatyūṭhsu //（「*a* 音に *eC* ではじまる *i*「行く」，*edh*「成長する」という動詞語根，あるいは*ūṬH* が後続するとき，先行要素と後続要素の代わりに「vṛddhi」が唯一代置される」）

[6]【*bhinatti* の派生】

(1) *bhid*	+	*lAṬ*	P.3.2.123
(2) *bhid*	+	*tiP*	P.3.4.78
(3) *bhi*	+ *ŚnaM* + *d* +	*ti*	P.3.1.78, P.1.1.47
(4) *bhi*	+ *na* + *t* +	*ti*	P.8.4.55
bhinatti			

［派生説明］

(1) の段階で P.3.2.123 により *bhid* に現在接辞 *lAṬ*が導入される。(2) の段階で P.3.4.78 により *lAṬ*に三人称単数「parasmaipada」の代置要素である *tiP* が代置される。(3) の段階で *bhid* は *rudh* ではじまる動詞語根群の動詞語根であり，「sārvadhātuka」である *ti* が後続しているので P.3.1.78 により*ŚnaM* がおこる。*ŚnaM* は *M* を it として持つ附加辞であるので，P.1.1.47 により *bhid* の最後の母音である *i* のあとにおこる。(4) の段階で *jhAL* である *d* に *khAR* である *t* が後続しているので，P.8.4.55 により *d* に *t* が代置され，*bhinatti* が派生される。

【関連規則】

P.3.2.123 vartamāne laṭ //（「現在に属する行為を表示する動詞語根のあとに *lAṬ*接辞がおこる」）

P.3.4.78 tiptasjhisipthasthamibvasmastātāṃjhathāsāthāṃdhvamiḍvahimahiṅ //（「*L* 音の代わりに，*tiP*, *tas*, *jhi*, *siP*, *thas*, *tha*, *miP*, *vas*, *mas*, *ta*, *ātām*, *jha*, *thās*, *āthām*, *dhvam*, *iṬ*, *vahi*, *mahiṄ* という代置要素がおこる」）

P.3.1.78 rudhādibhyaḥ śnam //（「*rudh*「妨げる」などの動詞語根のあとに*ŚnaM* 接辞がおこる」）

P.1.1.47 mid aco 'ntyāt paraḥ //（「最終の母音のあとに it である *m* 音がおこる」）

P.8.4.55 khari ca // khari ca parato jhalāṃ carādeśo bhavati //（「さらに，*khAR* が後続するとき *jhAL* の代わりに *cAR* という代置要素がおこる」）

[7]PIŚ51: nājānantarye bahiṣṭvaprakḷptiḥ //（「母音の他の要素との直接的連続性を根拠とする antaraṅga が適用されるべきとき，すでに生じている bahiraṅga に bahiraṅga 性は結果しない」）

[8]【本文の解説】反論者は，P.6.4.132 に*ūṬH* が言及されていない場合，*viśvauhaḥ*の派生（【*viśvauhaḥ*の派生：P.6.4.132 に*ūṬH* が言及されていない場合】）において antaraṅga 解釈規則の適用機会はないと考え，P.6.4.132 における*ūṬH* の言及は antaraṅga 解釈規則の指標ではないと主張する。

【*viśvauhaḥ*の派生：P.6.4.132 に*ūṬH* が言及されてい

【答論】そのように言ってはならない。なぜなら，接尾辞［「sārvadhātuka」「ārdhadhātuka」］は「aṅga」の部分に対して期待がおこるものとして，まさにその［「aṅga」］と結びつくからである。

さらに，*puganta* 云々に関して，［*laghūpadha* という語を bahuvrīhi としてではなく］ karmadhāraya として認めることによって，「接尾辞［「sārvadhātuka」「ārdhadhātuka」］が後続する「aṅga」の部分である，「laghu」である「upadhā」であるところの *iK* の代わりに「guṇa」がおこる」という意味が成立することが P.1.1.3 iko guṇavṛddhī という規則に関する Bhāṣya において認められており[9]，*bhinatti* などの事例に関して間違いがおこらないからである。

【2.3.1.1.1.3. P.6.4.132 の *ūṬH* は *prauhaḥ* などの語を派生するために規定されているという反論の否定】

akārāntopasarge 'nakārānte copapade vaher vāher vā ṇvivicāv anabhidhānān na sta eva / vāryūhetyādi tūhateḥ kvipi bodhyam / dhātūnām anekārthatvān nārthāsaṃgatiḥ / prauha ityādy asādhv eva vṛddher aprāpteḥ / asyohasyānarthakyān na prādūhoḍho ity asyāpi pravṛttiḥ //

a 音で終わる「upasarga」が先行する場合，さらに，「upapada」が *a* 音で終わる項目でない場合，動詞語根 *vah* あるいは *vāh* のあとに，*ṆvI* と *vIC* は決して起こらない。なぜなら，そのような派生形は文法的に正しくても実際の使用において認証されないから (anabhidhānāt) [10]。

vāryūhā（*vāryūh*「水瓶を運ぶもの」inst. sg.）などの語形は，動詞語根 *ūh* に *KvIP* が後続するとき［派生されると］理解されるべきである。［*vāryūh* が動詞語根 *ūh*（「推測する」）から派生されても］動詞語根は複数の意味を持っているから［「水を運ぶもの」という］意味に不整合

ない場合】で適用されている P.7.3.86 の *laghūpadhasya* をバフヴリーヒで解釈すると P.7.3.86 は「「upadhā」に「laghu」をもつ「aṅga」のあとに「sārvadhātuka」と「ārdhadhātuka」が後続するとき，その「aṅga」の *iK* の代わりに「guṇa」がおこる」と解釈できる。その場合，上述した *bhinatti* の派生の (2) の段階で，*bhinat* という「aṅga」は「upadhā」に「laghu」である *a* をもっているので，*ti* という「sārvadhātuka」が後続しているとき，P.7.3.86 の適用条件を満たしてしまうことになる。そのため，*bhinat* の *iK* である *i* の代わりに「guṇa」がおこり，誤った語形を派生してしまうことになる。しかし，実際には *bhinatti* の派生では「guṇa」はおこらない。そのため，反論者は上述のような解釈ではなく，「「aṅga」の「upadhā」の「laghu」である *iK* に「sārvadhātuka」と「ārdhadhātuka」が後続するとき，*iK* の代わりに「guṇa」がおこる」と解釈すべきであると考える。そのように考えた場合，P.7.3.86 における「「sārvadhātuka」と「ārdhadhātuka」が後続するとき」という条件の言及は，*iK* を限定するものであると考えることができるので，この場合の P.7.3.86 による「guṇa」代置は，*iK*（母音）と他の要素すなわち「sārvadhātuka」と「ārdhadhātuka」との直接的連続性を根拠とする antaraṅga となる。したがって，PIŚの Paribhāṣā51 で規定されている nājāntarye という解釈規則により，P.6.4.132 に *ūṬH* が言及されていなかったとしても，*viśvauhaḥ* の派生において antaraṅga 解釈規則は適用機会を持たないのではないかというのである。

[9] パタンジャリは次のように述べている。

MBh on P.1.1.3 (I.47.6-9): pugantalaghūpadhasyeti naivaṃ vijñāyate pugantasyāṅgasya laghūpadhasya ceti / kathaṃ tarhi / puky antaḥ pugantaḥ / laghvy upadhā laghūpadhā / pugantaś ca laghūpadhā ca pugantalaghūpadhaṃ / pugantalaghūpadhasyeti / avaśyaṃ caitad evaṃ vijñeyam / aṅgaviśeṣaṇe hi satīha prasajyeta bhinatti chinattīti //

（「[P.7.3.86 の] *pugantalaghūpadasya* という［部分］は「「upadhā」に「laghu」をもつ［「aṅga」の *iK* の］代わりに，あるいは，*pUK* を最終要素として持つ［「aṅga」の *iK* の］代わりに」とこのようには理解されない。

［問］それではどのように［理解されるのか］。

［答］ *puganta* とは［「aṅga」の］*pUK* の先行要素［である *iK*］であり，*laghūpadhā* とは［「aṅga」の］「laghu」である「upadhā」［である *iK*］である。そして，*pugantalaghūpadha* とは［「aṅga」の］*pUK* の先行要素［である *iK*］と［「aṅga」の］「laghu」である「upadhā」［である *iK*］である。［それの第六格単数形が規則の中の］*pugantalaghūpadhasya* である。そして，このことは以上のように必ず理解されるべきである。なぜなら，［*puganta* と *laghūpadha* が］「aṅga」に対する限定要素である場合には，［バフヴリーヒで解釈され］*bhinatti, chinatti* というこれらの事例において［*iK* に「guṇa」代置］が帰結してしまうだろうからである」）

パタンジャリは，複合語 *puganta* を *puki antaḥ* というように分析している。この場合の *anta* という語は，Padamañjarī では samīpa（「近接要素」），Nyāsa では「*pUK* が後続する場合の構成要素」(puki parato 'vayavaḥ) を意味する。

[10]【本文の解説】P.6.4.132 に *ūṬH* が言及されていなかったとしよう。この場合，P.6.1.94 により「vṛddhi」代置はおこらないので *prauhaḥ* は派生し得ない。そのため，パーニニが P.6.4.132 に *ūṬH* を言及したのは antaraṅga 解釈規則を知らしめるためではなく，*prauhaḥ* の派生に必要だったからではないのかという反論が提起される。

もし P.6.4.132 に *ūṬH* が言及されていなければ *prauhaḥ* の派生は以下のようになり正しい語形は派生されない。

【*prauhaḥ* の派生：1】

(1) *pra* + *vah* + *ṆvI* + *Śas*
(2) *pra* + *vah* + *ϕ* + *as* P.6.1.67
(3) *pra* + *vāh* + *ϕ* + *as* P.7.2.116
*(4) *pra* + *uāh* + *ϕ* + *as* P.6.4.132
*(5) *pra* + *uh* + *ϕ* + *as* P.6.1.108
*(6) *pra* + *oh* + *ϕ* + *as* P.7.3.86
*(7) *proh* + *ϕ* + *as* P.6.1.94
*(8) *proh* + *ϕ* + *arU* P.8.2.66
*(9) *proh* + *ϕ* + *aḥ* P.8.3.15
**prohaḥ*

[派生説明]

(1) の段階で *prauhaḥ* の構成要素が並べられる。(2) の段階で P.6.1.67 により *ṆvI* が脱落する。(3) の段階で *pravah* に *ṆvI* が後続しているので P.7.2.116 により *vah* の *a* に「vṛddhi」である *ā* が代置される。*(4) の段階で *pravāh* は *vāh* を最終要素とする「bha」であるので P.6.4.132 により *vāh* の *v* に「saṃprasāraṇa」である *u* が代置される。*(5) の段階で P.6.1.108 により,「saṃprasāraṇa」である *u* とそれに後続する *ā* の代わりに先行要素である *u* の唯一代置がおこる。*(6) の段階で *uh* が「ārdhadhātuka」である *ṆvI* に後続されているので P.7.3.86 により「laghu」である「upadhā」の *u* に「guṇa」が代置される。*(7) の段階で *a* で終わる「upasarga」である *pra* に *o* で始まる *oh* が後続しているので, P.6.1.94 により *a* と *o* の代わりに後続要素である *o* が唯一代置される。*(8) の段階で P.8.2.66 により「pada」の最終要素である *as* の *s* に *rU* が代置される。(9) の段階で「pada」の最終要素である *rU* に休止が後続しているので P.8.3.15 により *rU* に *ḥ* が代置される。派生形は, **prohaḥ* であって *prauhaḥ* ではない。

しかし, P.6.4.132 に *ūṬH* が言及されることによって *prauhaḥ* の派生は以下のように説明できる。

【*prauhaḥ* の派生:2】

(1) *pra* + *vah* + *ṆvI* + *Śas*
(2) *pra* + *vah* + *ϕ* + *as* P.6.1.67
(3) *pra* + *vāh* + *ϕ* + *as* P.7.2.116
(4) *pra* + *ūāh* + *ϕ* + *as* P.6.4.132
(5) *pra* + *ūh* + *ϕ* + *as* P.6.1.108
(6) *prauh* + *ϕ* + *as* P.6.1.89
(7) *prauh* + *ϕ* + *arU* P.8.2.66
(8) *prauh* + *ϕ* + *aḥ* P.8.3.15
prauhaḥ

[派生説明]

(1) の段階で *prauhaḥ* の構成要素が並べられる。(2) の段階で P.6.1.67 により *ṆvI* が脱落する。(3) の段階で *pravah* に *ṆvI* が後続しているので P.7.2.116 により *vah* の *a* に「vṛddhi」である *ā* が代置される。(4) の段階で *pravāh* は *vāh* を最終要素とする「bha」であるので P.6.4.132 により *vāh* の *v* に「saṃprasāraṇa」である *ū* (*ūṬH*) が代置される。(5) の段階で P.6.1.108 により,「saṃprasāraṇa」である *ū* とそれに後続する *ā* の代わりに先行要素である *ū* の唯一代置がおこる。(6) の段階で *pra* の *a* に *ūh* の *ū* (*ūṬH*) が後続しているので P.6.1.89 により *a* と *ū* の代わりに「vṛddhi」が唯一代置される。(7) の段階で P.8.2.66 により「pada」の最終要素である *as* の *s* に *rU* が代置される。(8) の段階で「pada」の最終要素である *rU* に休止が後続しているので P.8.3.15 により *rU* に *ḥ* が代置され, *prauhaḥ* が派生される。

このような反論に対してナーゲーシャは次のように答える。

a で終わる「upasarga」に先行された *vah* に *ṆvI* が導入された *prauhaḥ* (*pra+vah+ṆvI+Śas*), あるいは, *a* で終わらない項目 *vāri* を「upapada」として *ṆvI* が導入された複合語 *vāryūhā* (*vāri+vah+ṆvI+Ṭā*) などは, 文法的には正しいが, 実際の言語使用のないものである。したがって, P.6.4.132 の *ūṬH* はこれらの語形を派生するために言及されたわけではない。

なお, *ṆvI* 接辞導入規則は, P.3.2.64 vahaś ca //(「ヴェーダにおいては *sUP* で終わるものが「upapada」であるとき, *vah* という動詞語根のあとに *ṆvI* 接辞がおこる」)である。

【関連規則】

P.6.1.67 ver apṛktasya //(「「apṛkta」である *v* の脱落がおこる」)

P.7.2.116 ata upadhāyāḥ //(「*Ñ* あるいは *Ṇ* を it として持つ [接辞が] 後続するとき,「aṅga」の「upadhā」の「laghu」である *a* の代わりに「vṛddhi」がおこる」)

P.6.4.132 vāha ūṭh //(「*vāh* でおわる「bha」の *v* の代わりに「saṃprasāraṇa」である *ū* (*ūṬH*) の代置がおこる」)

P.6.1.108 samprasāraṇāc ca //(「「saṃprasāraṇa」に母音が後続するとき, 先行要素と後続要素の代わりに唯一先行要素が代置される」)

P.7.3.86 pugantalaghūpadhasya ca //(「「sārvadhātuka」と「ardhadhātuka」が後続するとき, *pUK* を最終要素として持つ「aṅga」の *iK* の代わりに, あるいは,「laghu」である「upadhā」をもつ「aṅga」の *iK* の代わりに「guṇa」がおこる」)

P.6.1.94 eṅi pararūpam //(「*a* 音を最終要素として持つ「upasarga」に *eṄ* で始まる動詞語根が後続するとき, 先行要素と後続要素の代わりに後続要素が唯一代置される」)

P.6.1.89 etyedhatyūṭhsu //(「*a* 音に *eC* ではじまる *i*「行く」, *edh*「成長する」という動詞語根, あるいは *ūṬH* が後続するとき, 先行要素と後続要素の代わりに「vṛddhi」が唯一代置される」)

P.8.2.66 sasajuṣo ruḥ //(「*s* を最終要素として持つ「pada」と *sajuṣ* というこの「pada」の最終要素の代わりに *rU* がおこる」)

P.8.3.15 kharavasānayor visarjanīyaḥ //(「*khAR* と休止が後

はない[11]。

［しかし，*ūh* に *KvIP* が後続する］ *prauhaḥ* (*praūh*「運ぶもの」, acc. pl.) などの語形はまさに不正形である。なぜなら「vṛddhi」代置が結果しないからである。この［*ūhas* の一部である］ *ūha* は意味を持たないものであるから，vt. 3 on P.6.1.89 prād ūhoḍhoḍhyeṣaiṣyeṣu も適用されない[12]。

【2.3.1.2. kāryakālapakṣa における tripādī での antaraṅga 解釈規則の適用】

na ca kāryakālapakṣe tripādyām etatpravṛttir durvāreti vācyam / pūrvaṃ prati parasyāsiddhatvād antaraṅgābhāvena pūrvasya tannirūpitabahiraṅgatvābhāvāt tayā tasyāsiddhatvapratipādanāsaṃbhavāt / na cānayā pūrvasyāsiddhatvāt tadabhāvena taṃ prati parāsiddhatvaṃ pūrvatra (P.8.2.1) ity anena vaktum aśakyam iti vācyam / evaṃ hi vinigamanāvirahād ubhayor apy apravṛttyāpatteḥ / kiṃca pūrvatrety asya pratyakṣatvena tenānumānikyā asyā bādha evocitaḥ / ataḥ kāryakālapakṣe 'pi tripādyām asyā anupasthitir eva //

【反論】しかし，［antaraṅga 規則 x が tripādī 中の規則であり，bahiraṅga 規則 y がそこに含まれない規則である場合に，］ kāryakālapakṣa では，tripādī においてこの［解釈規則］がおこることは避けがたい。

【答論】そのように言ってはならない。［P.8.2.1 pūrvatrāsiddham により，］先行［規則 y］に対して後続［規則 x］が成立していない［ことになる］から，antaraṅga 規則 x は存在しないものとみなされる。したがって，先行［規則 y］はその［antaraṅga 規則 x に］条件づけられた bahiraṅga とはならないから，その［解釈規則］によってその［先行規則 y］の［適用が］成立していないことを説明することはできないからである。

【反論】この［antaraṅga 解釈規則 x］によって先行［規則 y］［の適用］は成立していないから，その［先行規則 y は］存在しない。したがって「先行規則 y に対して後続規則 x は成立していない」ということを P.8.2.1 pūrvatrāsiddham というこの規則によって言うことはできない。

【答論】そのように言ってはならない。なぜならこのような場合，［antaraṅga 規則と P.8.2.1 のどちらが適用されるかを］決定する要素がない

続するとき *r* を最終要素として持つ「pada」の最終要素に visarga 代置がおこる」)

[11] この場合の *vāryūhā* の派生は以下の通りである。

【*vāryūhā* の派生】

(1) *vāri-Ṅas* + *ūh* + *KvIP* + *Ṭā*
(2) *vāri-as* + *ūh* + *ϕ* + *ā* P.6.1.67
(3) *vāri* + *ūh* + *ϕ* + *ā* P.2.4.71
(4) *vāry* + *ūh* + *ϕ* + *ā* P.6.1.77
vāryūhā

［派生説明］

(1) の段階で *vāryūhā* の構成要素が並べられる。(2) の段階で P.6.1.67 により *KvIP* の *v* に *ϕ* が代置され，脱落がおこる。(3) の段階で P.2.4.71 により *vāri* に後続する *sUP* である *Ṅas* の脱落がおこる。(4) の段階で *iK* である *vāri* の *i* に母音である *ū* が後続しているので *i* の代わりに半母音である *y* が代置され，*vāryūhā* が派生される。

【関連規則】

P.3.2.76 kvip ca //（「「upapada」があってもなくても，すべての動詞語根のあとに *KvIP* 接辞がおこる」)

P.6.1.67 ver apṛktasya //（「「apṛkta」である *v* の脱落がおこる」)

P.2.4.71 supo dhātuprātipadikayoḥ //（「「dhātu」という術語で呼ばれるものと，「prātipadika」という術語で呼ばれるものの内部に含まれる *sUP* の脱落がおこる」)

P.6.1.77 iko yaṇ aci //（「母音が後続するとき，*iK* の代わりに半母音代置がおこる」)

[12] 【本文の解説】上述したように，*prauhaḥ* (*pra+vah+-ṆvI+Śas*) あるいは *vāryūhā* (*vāri+vah+ṆvI+Ṭā*) などの語形は文法的には正しいが実際の言語運用において見出されないものである。ところで，*vāryūhā* などの語形は *vāri+ūh+KvIP+Ṭā* というように分析されるものとして，文法的にも正しくかつ実際の言語運用においても見出されるものである。*ūh* は動詞語根として複数の意味を表示することが可能であり，「水瓶を運ぶもの」という意味に関しても不整合はない。このことから，*prauhaḥ* の派生も動詞語根として *vah* ではなく *ūh* を想定して説明することが可能なのではないかと考えられる。言うまでもなくもしそのように考えれば，P.6.4.132 の適用機会は *prauhaḥ* の派生にはないことになる。すなわち，P.6.4.132 における *ūṬH* の言及が *prauhaḥ* の派生を説明することを目的としているとは言えないことになるのである。しかしながらナーゲーシャは，*pra+ūh+as* の段階では *a+ū* に「vṛddhi」代置は起こらず，結果するのは **prohaḥ* であって，*prauhaḥ* という語形は不正形となると説明する。

ところで，カーティアーヤナは，P.6.1.89 に対する第 3 vārttika で，*pra* に *ūha* が後続するとき，*pra* の *a* と *ūha* の *ū* の代わりに「vṛddhi」が唯一代置されるという追加規定を述べている。

vt. 3 on P.6.1.89(III.69.9-10): prād ūhoḍhoḍyeṣaiṣyeṣu //（「*pra* に *ūha*, *ūḍha*, *ūḍhi*, *eṣa*, *eṣya* というこれらの［語］が後続するとき［「vṛddhi」代置がおこる］」)

この追加規定を考慮すれば，*pra* に *ūha* (*ūh+as* の *a*) が後続するということから，「vṛddhi」代置が適用可能となる。しかし，この派生の *ūha* は *ūh* と *as* の *a* という単なる音の連続であり，有意味単位ではない。これに対して vt. 3 の追加規定は，有意味単位としての *ūha* を想定している。したがって以下の解釈規則により，*pra+ūha* の段階においてこの追加規定を適用することはできない。

PIŚ14: arthavadgrahaṇe nānarthakasya //（「文法規則において有意味項目が言及されているとき，その項目によって意味をもたない項目は意図されない」)

のでどちらの規則も適用されないからである。

さらに，P.8.2.1 pūrvatrāsiddham というこの［規則］は直接知覚されるので，それ［P.8.2.1］によって［*ūṬH* を徴標とする］推理に基づくこの［antaraṅga 解釈規則］がまさに阻止されるのが適切である。このことから，kāryakālapakṣa でも tripādīにおいてこの［解釈規則］はまさに想起されない[13]。

【2.3.1.2. kāryakālapakṣa における tripādīでの antaraṅga 解釈規則の適用】

ata eva kāryakālapakṣam evopakramyokta-yuktīr uktvāto 'yukto 'yaṃ parihāro na vā bahiraṅgalakṣaṇatvād itīty uktaṃ visarjanīyasūtre bhāṣye siddhāntinā / tripādīsthe 'ntaraṅge kartavye 'yaṃ parihāro na yukta iti tadarthaḥ / kiṃ tu vacanam evārabdhavyam iti tadāśayaḥ / ata eva nigālyata ityādau latvārthaṃ tasya doṣa iti vacanam evārabdham / anyathāntaraṅgatvāṇ ṇilopāt pūrvaṃ vaikalpikalatve tadvaiyarthyaṃ spaṣṭam eva //

まさにこのゆえに，P.8.3.15 kharavasānayor visarjanīyaḥに関する Bhāṣya において［パタンジャリは］，まさに kāryakālapakṣa をふまえて上述の論理を述べた上で，次のような確定見解を述べている。

「このゆえに，『複合語中で「pada」の最終要素である *r* 音に後続要素 (uttarapada) が後続するとき，visarjanīya 代置は起こらない』という vt. 1 に対する『あるいは，この禁止規定は述べられる必要はない。なぜなら，その *r* 音は bahiraṅga を特徴とするものであるから』と述べられた vt. 2 のこの解決法は適切ではない」[14]

この［Bhāṣya の］意味するところは，適用されるべき antaraṅga 規則が tripādī中の規則である場合，この［antaraṅga 解釈規則に依拠する］解決方法は適当ではない，ということであ

[13]【本文の解説】P.8.2.1 pūrvatrāsiddham は，P.8.2.2 以降で規定されている規則はその規則以前に規定されている規則に対して成立していないと見なされることを規定している。

P.8.2.1pūrvatrāsiddham //（「P.1–8.1 までで規定された規則に対して P.8.2–8.4 で規定された規則は効力を生じない。P.8.2-8.4 で規定された規則同士でも先行する文法規則に対して後続する文法規則は効力を生じない」）

antaraṅga 解釈規則は sapādasaptādhyāyīにあると考えられているので，P.8.2.1 により tripādīにある規則は antaraṅga 解釈規則に対して成立していないと見なされる。

しかし次の解釈規則がある。

PIŚ3: kāryakālaṃ saṃjñāparibhāṣam //（「術語規則と解釈規則は操作によって引きつけられる」）

この解釈規則は，kāryakālapakṣa を表明したものである。この解釈規則によれば，解釈規則は tripādīで規定された操作によっても引きつけられる。ナーゲーシャは次のように述べている。

PIŚ (2.8-9): kāryakālapakṣe tu tripādyām apy upasthitir iti viśeṣaḥ /（「しかし，kāryakālapakṣa では tripādīにおいても［解釈規則が］想起されるという違いがある」）

したがって，antaraṅga 解釈規則も tripādīで規定された操作に対して有効に機能することが推測できる。しかし，antaraṅga 解釈規則が tripādīで規定されている操作にも有効に働くとすると，以下のような問題がおこる。

今 tripādīで規定されている操作が antaraṅga であり，sapādasaptādhyāyīで規定されている操作が bahiraṅga であるとしよう。P.8.2.1 によると，前者が後者に対して成立していないことになるので前者が適用されることになり，一方で antaraṅga 解釈規則によると後者が前者に対して成立していないことになるので後者が適用されることになる。このような場合どちらにしたがって規則適用の優先性を決定するのかということが問題になる。kāryakālapakṣa でおこる antaraṅga 解釈規則に関しておこる問題とはこの問題である。この問題に対するナーゲーシャの答えは，P.8.2.1 はパーニニによって直接言及されたものであるから，その存在が推理によって認められている antaraṅga 解釈規則を排除すると考えるべきであるというものである。

[14]カーティアーヤナは，P.8.3.15 に対する第 1 vārttika で次の追加規定を述べている。

vt. 1 on P.8.3.15: visarjanīyo 'nuttarapade //（「複合語中の後続要素が *khAR* で始まる項目である場合，*r* を最終要素として持つ「pada」の最終要素に visarga 代置はおこらない」）

パタンジャリによれば，*nārkuṭa* (*nār-kuṭa*)「人の入る容器（保護者）の」，*nārpatya* (*nār-patya*)「人の王の子孫」というこのような事例においては，visarga 代置はおこってはならない。

しかし，カーティアーヤナは，続く第 2 vārttika でこの追加規定を否定する。

vt. 2 on P.8.3.15: na vā bahiraṅgalakṣaṇatvāt //（「あるいはこの追加規定を設ける必要はない。なぜなら，［*r* 音を実現する規則は］bahiraṅga 規則と特徴づけられるから」）

この第 2 vārttika に関してパタンジャリは次のように述べる。

MBh on P.8.3.15 (III. 426. 2-9): bahiraṅgo rephaḥ / antaraṅgo visarjanīyaḥ / asiddhaṃ bahir-aṅgam antaraṅge // naiṣa yuktaḥ parihāraḥ / antaraṅgaṃ bahiraṅgam iti pratidvandvabhāvināv etau pakṣau / saty antaraṅge bahiraṅgaṃ sati bahiraṅge 'ntaraṅgam / na cātrāntaraṅgabahiraṅgayor yugapatsamavasthānam asti /（「*repha*（*r* 音）が bahiraṅga で visarga が antaraṅga である。antaraṅga 操作が適用されるべきとき，bahiraṅga 操作は成立していない。

しかしこの解決方法は適切ではない。

antaraṅga と bahiraṅga というこれら二者は対立的なものとしておこって対をなすものである。すなわち，antaraṅga があるとき bahiraṅga があり，bahiraṅga があるとき antaraṅga があるというように。しかしこれらの事例において antaraṅga と bahiraṅga が同時におこることはない」）

る。[そしてこの Bhāṣya の] 意図するところは，[antarańga 規則が tripādī中の規則である場合には antarańga 解釈規則に依拠するのではなく] 反対に，[vt. 1 のような] 言明が定式化されるべきである，ということである[15]。

まさにこのような理由から，*nigālyate*(「飲み込まれる」*ni-gṛ*, causative *ni-gāli*, 3rd. sg. passive) などの事例[16] における *l* 音代置を目的として，「その [P.1.1.58 に対する追加規定である『さらに，先行規則に対して成立しないものである場合には原要素と同じように扱われることはない』という vt. 3] には難点がある」という

[15] 【本文の解説】

【*nārpatya* の派生】

(1) *nṛpati* + *Ṇya* P.4.1.85
(2) *nārpati* + *ya* P.7.2.117
(3) *nārpat* + *ya* P.6.4.148
nārpatya
*(3) *nāḥpati* + *ya* P.8.3.15

[派生説明]

(1) の段階で P.4.1.85 により *nṛpati* に彼の子孫の意味で*Ṇya* が導入される。(2) の段階で*Ṇ*を it として持つ「taddhita」接辞である*Ṇya* が後続しているので P.7.2.117 により「ańga」の最初の母音に「vṛddhi」が代置される。(3) の段階で「bha」である *nārpati* に「taddhita」接辞である*Ṇya* が後続しているので P.6.4.148 により「bha」の最終要素である *i* が脱落して *nārpatya* が派生される。この派生の (3) の段階で *nār* の *r* に P.8.3.15 により visarga 代置が適用可能である。この visarga 代置を禁止するために，vt. 1: visarjanīyo 'nuttarapade という禁止規定が提案されている。もし visarga 代置が適用されれば，*nāḥpatya* という不正形が結果するであろう。

しかし，上記派生手続きの (2) の段階で適用されている P.7.2.117 による「vṛddhi」代置を，(3) で適用可能である P.8.3.15 による visarga 代置に対する bahirańga とみなせばどうであろう。この場合，antarańga 解釈規則の適用により，「vṛddhi」代置を visarga 代置に対して成立していないものとみなすことができよう。これが vt. 1 に提案された禁止規定を必要ないものとして否定する vt. 2 の意図である。

パタンジャリは，カーティアーヤナのこの vt. 2 の提案を否定する。パタンジャリによれば，antarańga 解釈規則が適用できる環境は，「antarańga があるとき bahirańga があり，bahirańga があるとき antarańga がある」という環境である。visarga 代置は tripādī で規定されている操作である (P.8.3.15)。したがって，P.8.2.1 pūrvatrāsiddham によって，その操作は，P.7.2.117 が規定する「vṛddhi」代置に対して antarańga であっても，存在しないものとみなされ，antarańga 解釈規則の適用環境にないのである。パタンジャリが vt. 2 の提案を否定するその意図は，要するに，antarańga が tripādī にある規則で規定されているから vt. 2 は言われるべきではないということである。パタンジャリによれば，antarańga が tripādī の規則で規定されている操作であり，bahirańga が sapādasaptādhyāyī にある規則で規定されている操作である場合には，antarańga 解釈規則は有効でない。これが重要なここにおけるポイントである。

【関連規則】

P.4.1.85 dityadityādityapatyuttarapadāṇ ṇyaḥ // (「*diti*, *aditi*, *āditya* のあとに，さらに，*pati* を後続要素とする「prātipadika」のあとに，この規定以降，P.4.4.2 までに規定されている意味で*Ṇya* 接辞がおこる」)

P.7.2.117 taddhiteṣv acām ādeḥ // (「*ñ*と*Ṇ*を it として持つ「taddhita」接辞が後続するとき，「ańga」の母音のうち最初の母音の代わりに「vṛddhi」代置がおこる」)

P.1.1.51 uraṇ raparaḥ // (「*ṛ*に代置される *aṆ*は，*r* を後続する」)

P.6.4.148 yasyeti ca // (「最終要素に *i* 音または *a* 音を持つ「bha」に [女性形の] *ī*または「taddhita」接辞が後続するとき，その「bha」の最終音に脱落がおこる」)

P.8.3.15 kharavasānayor visarjanīyaḥ // (「*khAR* と休止が後続するとき，*r* を最終要素として持つ「pada」の最終要素に visarga 代置がおこる」)

[16] 【*nigālyate* の派生】

(1) *ni-gṛ*	+ *ṆiC*		P.3.1.26
(2) *ni-gṛ*	+ *ṆiC* +	*lAṬ*	P.3.2.123
(3) *ni-gṛ*	+ *ṆiC* +	*tiP*	P.3.4.78
(4) *ni-gṛ*	+ *ṆiC* +	*ta*	P.1.3.13
(5) *ni-gṛ*	+ *ṆiC* +	*te*	P.3.4.79
(6) *ni-gṛ*	+ *ṆiC* + *yaK* +	*te*	P.3.1.67
(7) *ni-gṛ*	+ *ϕ* + *yaK* +	*te*	P.6.4.51
(8) *ni-gār*	+ *ϕ* + *yaK* +	*te*	P.7.2.115
(9) *ni-gāl*	+ *ϕ* + *yaK* +	*te*	P.8.2.21
nigālyate			

[派生説明]

(1) の段階で P.3.1.26 により *ni-gṛ*に使役接辞*ṆiC* が導入される。(2) の段階で P.3.2.123 により現在接辞 *lAṬ*が導入される。(3) の段階で P.3.4.78 により *lAṬ*に三人称単数「parasmaipada」の代置要素である *tiP* が代置される。(4) の段階で P.1.3.13 により，行為と行為の目的の表示のために，「ātmanepada」の代置要素である *ta* が代置される。(5) の段階で P.3.4.79 により「ātmanepada」の最終要素である *a* の代わりに *e* が代置される。(6) の段階で派生動詞語根 *ni-gṛ-i* (P.3.1.32 sanādyantā dhātavaḥ) に行為と行為の目的を表示する「sārvadhātuka」である *te* が後続しているので，P.3.1.67 により *yaK* がおこる。(7) の段階で *yaK* は附加辞 *iṬ*で始まる「ārdhadhātuka」ではないので，P.6.4.51 により*ṆiC* の脱落がおこる。(8) の段階で *ni-gṛ*は母音を最終要素として持つ，*Ṇ*を it として持つ接辞に後続された「ańga」であるので P.7.2.115 により*ṛ*に「vṛddhi」である*ā* が代置される。その*ā* は自動的に P.1.1.51 により *r* に後続される。(9) の段階で *gṛ*に *ī* (*ṆiC*) が後続しているので P.8.2.21 により *gṛ*の *r* の代わりに任意で *l* がおこり，*nigālyate* が派生される。

【関連規則】

P.3.1.26 hetumati ca // (「使用者 (hetu) の働きが表示されるべきとき，動詞語根のあとに*ṆiC* 接辞がおこる」)

P.3.2.123 vartamāne laṭ // (「現在に属する行為を表示する動詞語根のあとに *lAṬ*接辞がおこる」)

P.3.4.78 tiptasjhisipthasthamibvasmastātāṃjhathāsāthāṃdhvamiḍvahimahiṅ // (「*L* 音の代わりに，*tiP*, *tas*, *jhi*, *siP*, *thas*, *tha*, *miP*, *vas*, *mas*, *ta*, *ātām*, *jha*, *thās*,

言明 (vt. 10) が定式化されている。もし反対に [antaraṅga 解釈規則が tripādī中の antaraṅga 規則に関係する] とするならば，antaraṅga であることから*ṆiC* の脱落に先立って任意に *l* 音代置が適用されることになり，この場合その言明 [vt. 10] の不要性はまったく明らかである[17]。

【2.3.1.2. kāryakālapakṣa における tripādīでの antaraṅga 解釈規則の適用】

ye 'pi lakṣyānurodhād ānumānikyāpy antaraṅgaparibhāṣayā pratyakṣasiddhasya pūrvatretyasya bādhaṃ vadanti te 'pi lakṣaṇaikacakṣurbhir nādartavyā iti dik //

文法規則によって特徴づけられるべき正しい語形 (lakṣya) に随順して，antaraṅga 解釈規則は確かに推理に基づいて確立されるものであるとしても，それによって直接知覚によって確立される P.8.2.1 pūrvatrāsiddham が阻止される，と主張するものたちがいるとしても，文法規則 (lakṣaṇa) だけに目を注ぐ文法家達は彼らを気にする必要はない。

以上が一般的議論の方向である。

(未完)

参考文献及び略号

MBh: The *Vyākaraṇa-Mahābhāṣya* of Patañjali. 3 vol. Ed. by F. Kielhorn. Fourth edition by Abhyankar K. V. Pune: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1962-72.

PIŚ: Nāgeśabhaṭṭa's *Paribhāṣenduśekhara*. See Abhyankar 1962.

vt.: Kātyāyana's Vārttika. See MBh.

Abhyankar, K.V.

1960 *The Paribhāṣenduśekhara of Nāgojībhaṭṭa*. Pt. 2, edited and explained by Kielhorn F. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. (2nd. ed.)

1962 *The Paribhāṣenduśekhara of Nāgojībhaṭṭa*. Pt. 1, edited critically with the Commentary Tattvādarśa

---

āthām, dhvam, iṬ, vahi, mahiṄ という代置要素がおこる」)

P.1.3.13 bhāvakarmaṇoḥ //(「行為と行為の目的が表示されるべきとき，「ātmanepada」がおこる」)

P.3.4.79 ṭita ātmanepadānāṃ //(「*Ṭ*を it として持つ *L* 音の代わりに「ātmanepada」がおこる。その「ātmanepada」の「ṭi」(最終母音で始まる音節) の代わりに *e* が代置される」)

P.3.1.67 sārvadhātuke yak //(「行為と行為の目的を表示する「sārvadhātuka」が後続するとき，動詞語根のあとに *yaK* 接辞がおこる」)

P.6.4.51 ṇer aniṭi //(「附加辞 *iṬ*で始まらない「ārdhadhātuka」が後続するとき*Ṇi* の脱落がおこる」)

P.6.4.64 āto lopa iṭi ca //(「*iṬ*と母音で始まる *K* と*Ṅ* を it として持つ「ārdhadhātuka」が後続するとき，「guru」である*ā* を最終要素とする「aṅga」の*ā* の脱落がおこる」)

P.7.2.115 aco ñṇiti //(「*Ñ*あるいは*Ṇ*を it として持つ [接辞が] 後続するとき，母音を最終要素とする「aṅga」の代わりに「vṛddhi」がおこる」)

P.8.2.21 aci vibhāṣā //(「母音で始まる接辞が後続するとき，*gṛ*の *r* の代わりに任意に *l* 代置がおこる」) 単一項目 x に関する「x で始まる」(tadādi)「x で終わる」(tadanta) の適用は，P.1.1.21 ādyantavad ekasmin という拡大適用規則による。

[17]【本文の解説】カーティアーヤナは，P.1.1.58 に対する第 3 vārttika で次のように述べる。

vt. 3 on P.1.1.58: pūrvatrāsiddhe ca //

(「さらに，P.8.2.1 pūrvatrāsiddham の支配下規則において，sthānivadbhāva はおこらない，という禁止規定が述べられるべきである」)

この vārttika は，tripādī中の規則の適用に際して代置要素を原要素として扱うこと (sthānivadbhāva) を禁止する。

しかし，P.1.1.58 に対する第 1 0 vārttika に次のように述べられる。

vt. 10 on P.1.1.58: tasya doṣaḥ saṃyogādilopalatvaṇatveṣu //

(「「saṃyoga」の第一要素の脱落操作，*l* 音代置操作，*ṇ*音代置操作に関して，その [vt. 3 の禁止規定] には難点がある」)

「saṃyoga」の第一要素の脱落操作，*l* 音代置操作，*ṇ* 音代置操作は，それぞれ tripādī中の P.8.2.29，P.8.2.21，P.8.4.11 によるものである。*nigālyate* の場合，派生の (9) の段階で適用されている P.8.2.21 による *l* 音代置操作は母音で始まる接辞*ṆiC* を根拠として適用される。しかし，*ṆiC* は P.8.2.21 が適用される段階ですでに脱落しているので vt. 3 で示されているように tripādīで規定されている操作の適用に関しては代置要素が原要素として扱われないのであれば母音で始まる接辞がないので P.8.2.21 は適用できないことになる。そのような事態を考慮して vt. 10 が述べられているのである。

ところが，もし antaraṅga 解釈規則が P.8.2.1 を阻止するならば，この vt. 10 の言明は不要となる。*nigālyate* の派生の (6) の段階では，P.6.4.51 による*ṆiC* の脱落と P.8.2.21 による *l* 音代置が同時に適用可能である。*ṆiC* の脱落は *yaK* が根拠であるのに対し，*l* 音代置は *yaK* より先に導入される要素である*ṆiC* が根拠であるので，この場合 *l* 音代置が*ṆiC* の脱落に対して antaraṅga である。*l* 音脱落は tripādīで規定されている操作である。しかし，antaraṅga 解釈規則が P.8.2.1 を阻止するならば，(7) の段階で bahiraṅga である P.6.4.51 による*ṆiC* の脱落は，antaraṅga 解釈規則により，antaraṅga である P.8.2.21 による *l* 音代置に対して成立していないことになる。その場合，vt. 3 の tripādī における sthānivadbhāva の禁止規定に依拠せずとも，*l* 音脱落は適用可能となるので，vt. 10 によって vt. 3 の禁止規定の問題点を指摘する必要はないであろう。したがって，vt. 10 が言明されているということは，antaraṅga 解釈規則が P.8.2.1 を阻止するのではなく，反対に，P.8.2.1 pūrvatrāsiddham が antaraṅga 解釈規則を阻止することを示しているのである。

of MM. Vasudev Shastri Abhyankar. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute. (2nd. ed.)
Bronkhorst, Johannes
1986 *Tradition and Argument in Classical Indian Linguistics: The Bahiraṅga-paribhāṣā in the Paribhāṣenduśekhara.* Dordrecht, Boston, Lancaster, Tokyo: D.Reidel Publishing Company.
Cardona, George
1970 "Some principles of Pāṇini's grammar," *Journal of Indian Philosophy* 1: 40–74.
1988 *Pāṇini: His Work and its Traditions.* Vol.1. Delhi: Motial Banarsidass Publishers
1989 "Pāṇinian studies," In *New Horizon of Research in Indology*, 49–84. Pune: University of Poona.
Kielhorn, L. F.
1868 See Abhyankar 1962.
1874 See Abhyankar 1960.
間瀬　忍
2006a 「Paribhāṣenduśekhara 50: asiddhaṃ bahiraṅgam antaraṅge 研究 (1)」(『比較論理学研究』第 3 号, pp. 89–99)
2006b「『パリバーシェンドゥシェーカラ』における内的要因操作性」(『哲学』第 58 集, pp. 111–123)

（ませ　しのぶ,　広島大学大学院
文学研究科博士課程後期［インド哲学］）